

ペン俳句会 句会報(三二八号)

令和三年三月四日

新型コロナウイルス感染症拡大に鑑み、「メール句会」「オンライン句評会」を実施。  
兼題『春一番』、『果』

宮原 ユリ

寺町を駆け抜けて来し春一番  
キッチンに薔薇と個展の招待状  
神宮の紙垂(しで)を振るわせ春一番  
春愁や受難の果てのピエタ像  
春風をつれて新刊立ち読みす

斉藤 まさお

盆栽に間借りしてをり花すみれ  
雛の日や妻と飾りし五十年  
春一番機体よるめきランディング  
検査結果わかる日の朝梅一輪  
旨酒やほんのり苦し路のとう

中村 晃也

釣果なく土手の蓬を摘みにけり  
一夜明け疲れ果てたる恋の猫  
片減りの靴春泥を跨ぎけり  
春一番時間遅れの最終便  
春一番流刑の島の波しづき

長尾 進一郎

春一番島の鷗の木バリング  
原色の果物並べ春の市  
春眠の覚めて名曲終楽章  
大川端の引き船ゆるり春の暮  
春の雲動く気配のなかりけり

高橋 由紀子

田の果ての小さき古墳桃の咲く  
川面きらら鷹鳩と化し天に舞う  
すべり台の下に雀や春一番  
春愉しペイペイで買う果汁グミ  
「サクラサク」孫の合格酒ゆるり

大津 そうかい

陽春の山路足裏に弾みけり  
春浅き樹間の空の蒼さかな  
紅を重ぬる川辺落椿  
流水の旅路や果を誰か知る  
春一番世の悲しみを攫ひ行け

新田 ゆふき

熊野なる果無峠椿降る  
ながらえてこの世の端や春の三日月  
片頬に陽の戯れや春目覚め  
コロナ世を会はず過ごして春一番  
山里に畑打つ人の富士背負う

内藤 まりこ

二月果つ薄月残る大空に  
待合室今日で来りさめ春はじめ  
白梅や伸びたる枝に玉飾  
春一番入試の子にも追い風を  
栈橋に釣果を覗く春つらら

首藤 しずを

春一番ホニータールの打つシユート  
青き踏む風の冷たさあらばこそ  
雪の下三月青く生まれける  
春光や花屋に紛ふ果物店  
茂吉忌の梁につばくらまだ見えず

安藤 晃二

フエミニズム論争つり春一番  
雑居ビルの狭間に古木梅香る  
白梅に萼のみどりの極まれり  
果てしなき多摩の起伏や梅盛る  
ミモザ買ふ梅見帰りの直売所

森田 元斐

はためくや春一番の縄のれん  
あの角の風と光と沈丁花  
雀声の巡る境内春の色  
鈍色の午後冴え返る陸の果て  
農民の影なき農地すみれ咲く

土屋隴月夜（見学参加）

春一番ブーツを仕舞ふ昼下り

果てしなき流水を続べ陽は昇る

籠いっぱい果物盛りて夢見月

紅のオウム真似する春の宵

What a mess - 春一番のあれやこれ

（

志村 良知

春一番に古き歌口ずさみ

春一番蒼天渡りひもすがら

庭土に黄のクロツカス並びをり

東風隣家の梅のおすそ分け

いつ果つや電話は縷々と春の宵

次回は、令和三年四月一日（木）兼題は、

宮原ユリさん出題の『駅』、並びに、西川知世

さん出題の『桜』です。

季語を学ぶ 初学にかえて

西川 知世

四月の兼題は「駅」。駅はいろんな場面を繰り広げるからバラエティのある句が出るでしょう。

しかしながら季語ではないので、今回は英語表記が俳句の中心になっている句から引いてみようと思う。二月の句会で、初参加の土屋さんの句に、英語を片仮名で表記した出句の句があつて、英語

表記にしたほうが読んだ人に意味がわかるはずという評をしたことから想を得た。

春の雨街濡れ SHELL と紅く濡れ 富安風生

英語表記の俳句といえ、一番にこの句が浮かぶ。辿れば風生に辿りつく師系に私はいるので、この句は身近に感じているし、私の俳句系図の上流にこの句にあることは気に入っている。昭和十八年刊行の句集「冬霞」に載っている句。戦争前後の風景だから、きつとネオンサインだったのだろうとか想像する。となると、紅く濡れも細い崖（この句をシェルと書いてあつたらどうだろう。物が見えなくて、会社名の印象しか生まれない。ちよつと興ざめではないか…）。

俳句は文学というより、絵画だと言う人も少なからずいるほどである。絵画的に読む対象を捉え、読む人の琴線に伝えるものでもあると思つて、初心のころ、説明は不要：景を読み、情の部分は読んだ人に任せると言われた続けた。私は物分かりが遅くて、俳句に馴染んだ頃によくやく俳句には説明が邪魔だと気づいた。

一辨のはらりと解けし辛夷かな 風生

わが机妻が占めをり土筆むく "

退屈なガソリンガール柳の芽 "

掌にのせて子猫の品定め "

街の雨鶯餅がもう出たか "

まさなる空よりしだれ桜かな "

富安風生は、明治四十三年逋信省に入り、官界で活躍し、虚子に会い、風生の言葉借りると、：要するにお勤めも大事、俳句もシンケン、というの、少くともその自分のわたしの気持ちだったのだ…という記述がある。ペン俳句の先駆けのような言葉である。明治十八年生、昭和四十年没。